青森大学付属総合研究所

ブランディング研究センター
地域貢献センター
観光文化研究センター
SDG s 研究センター

総研だより

第 2 巻 第 5 号 2021 年 1 月 31 日

〒030-0943 青森市幸畑2-3-1 青森大学付属総合研究所 電話 017-738-2001

◇ **目 次**

1. ビジュアル・アイデンティーの統一性 ブランディング研究センター長 中村 和彦・・・1

2. 10～11 月の活動報告 観光文化研究センター長 佐々木豊志・・・1

3. SDGs 研究センター活動報告 SDGs 研究センター所長 藤 公晴・・・5

4. 「問屋町型」の SDGs を追求－協同組合青森総合卸センター
SDGs研究センター員 櫛引 素夫・・・7

5. 「東北新幹線 10 周年」オンライン・フォーラム 地域貢献センター員 櫛引 素夫・・・8

6. 「一人の人間にとっては小さな一歩だが、道民にとっては偉大な一歩」
—北海道新幹線・210km 高速運行体験 付属総合研究所・客員研究員 永澤 大樹・・・9

7. 青森市職員提案選考会に参加して—「青森市ストックフォトプロジェクト」実現に向けて
付属総合研究所・客員研究員 村上 亜弥・・・10

▽**総研日誌** ・・・11

▽**編集後記** ・・・11

【資料 1】 第 6 回 SDGs 研究センター勉強会・竹内健悟氏講演資料

【資料 2】 卒業論文 SDGs 研究センター賞・応募申請書

1．ビジュアル・アイデンティーの統一性

ブランディング研究センター長　中村　和彦

ユニバーシティー・アイデンティティーを体現するためには、ビジュアル・アイデンティティー（文字やデザインにより構成されるマーク）のマネジメントが重要であろう。

大学の場合、校章やシンボルマーク、ロゴマーク、エンブレム等がこれに相当すると考えられるが、視覚面におけるアイデンンティーを統一（なければ新たに作成）し、全学的に管理していく必要性が不可欠である。

過去 10 年、本学の印刷物（大学案内表紙、パンフレット、OC チラシ、写真）や HP を調査した結果、２～３年の共通項は見つけられても、10 年単位では、内容は勿論、字体のレタリックや色、フォントや配置等、一貫した取り組みがされていないのが現状であった。

企業や製品のブランドが長期的視野にたち、一貫した取り組みが必要（代表的な論者として Keller,片平ら）であるのと同様、大学のブランドも一朝一夕には成らないものである。

大学のブランドを強化するためには、大学自身の個性や理念を整理し、それらを体現するビジュアル・アイデンティティー（マークやメッセージ、タグライン等）を統一し、大学のイメージをビジュアル面でも確立していくことが重要であろう。

2．12～1 月の活動報告

観光文化研究センター長　佐々木豊志

今年度は、観光庁連携事業である「観光産業中核人材育成事業」に加え、２つの助成事業を展開している。前回も報告しているが、日本たばこ産業株式会社の「JT SDGs 貢献プロジェクト助成」と環境省の令和２年度の補正予算「国立・国定公園への誘客の推進事業費及び国立・国定公園、温泉地でのワーケーションの推進事業費補助金」の事業をこれまで進めてきた。

今号では、前回まで報告した事業に続き、昨年 12 月、年明け１月に実施した４つの事業（講座事業の通し番号⑫～⑮）を報告する

⑫「雪板づくり＆雪板体験講座」：「環境省観事業」

実施日：2020 年 12 月 19 日（土）、20 日（日）

会場：青森大学ヒュッテ（モヤヒルズ）

講師：其田知志（酸ヶ湯温泉ツアーガイド）

参加者：一般・学生　７名

観光文化研究センター事業では、一貫して「自然体験型観光商品」に取り組んできた。この回は、青森の冬の観光資源として欠かせない〝雪〟を対象にした。今年はコロナの影響でインバウンドが期待できないが、一昨年までは、雪がない中国・香港や台湾、東南アジアから雪を見にくる観光客が多かった。札幌雪まつりや八甲田の樹氷を観る目的でくる観光客もいるが、中には、スキーやスノーボードなどスノースポーツの体験を望む声が聞かれる。スキーやスノーボードはスキルが必要なため、レッスンを受ける時間が必要となり、体験するためにはハードルが高くなる。(欧米はレベルが高いスキーヤーが多い)

今回素材として選んだ〝雪板〟は、その課題を解決できる。サーファーである五味氏が発案し普及してきたもので、自分で容易に作ることができる雪遊びの道具である。スノーボードと異なりエッジがなく、バインディングもない。遊び方も特別なブーツもいらない。板に乗り自

由に容易に滑ることができる。エッジがないので圧雪されたゲレンデでは遊べないが、ふわふわの新雪で楽しむことができる。もちろん滑る技術はある程度必要だが、取り掛かるハードルはかなり下がる。深雪で転倒することすら楽しむことができるコンテンツになる。

初日は、あらかじめ反りをつけたコンパネを元に、参加者それぞれの発想で形を決めて、カットし、磨き、ニスを塗り１日でオリジナルの雪板を仕上げた。

２日目は、モヤヒルズのゲレンデで実際に滑走し、雪板の滑りを楽しんだ。

▲参加者が考えた形状に雪板をカットする。

▲参加者全員がオリジナル雪板を完成させた。

⑬「イグルーマイスター養成講座」（環境省事業）

実施日：2020 年 12 月 25 日(金)-27 日(日)

会場：酸ヶ湯温泉

参加者：一般学生・学生２０名

講師：佐々木豊志（青森大学観光文化研究センター）、塚原俊也（くりこま高原学校）

幾つかの事業では〝雪〟をテーマに取り上げている。この回は、今後青森県の観光イメージ戦略に提案をしたい〝イグルー〟というコンテンツである。暮らしの中では邪魔者にされる青森県の〝雪〟を、青森だからこその資源として、観光資源として活用するための取り組みになる。北極圏のイヌイットがアザラシの狩りのための仮宿として氷で作るドーム状の家である。長年野外教育の現場でイグルー作りに取り組んできた佐々木がイグルーの作りの知識と技術を伝え、イグルーをつくることができる県民を育成することを目的に実施した。

▲座学：イグルーの作り方

初日の午前中は、イグルーとイグルーの作り方の座学を行い。初日の午後からは実践でイグルー作りの技術を学ぶ演習を行い、３日間で、２つのイグルーを製作した。

▲演習：イグルー作りの技術演習

▲演習：イグルー作りの技術演習

⑭「八甲田トープウエイ山頂駅にイグルー建設」（環境省事業）

実施日：2020 年 12 月 28 日（月）・29 日（火）

会場：八甲田ロープウエイ山頂駅

参加者：一般・学生８名

〝雪を観光資源〟に。樹氷サミットのコラボ企画。八甲田ロープウエイの山頂駅にイグルーを建設する。樹氷とイグルーで、これからの雪国王国の新しいイメージ戦略を模索する。青森県観光国際戦略局、青森市観光課、八甲田樹氷国際ブランド化推進会議、八甲田振興協議会等の地域の観光産業関係機関へアピールしている。

▲八甲田山の樹氷原にイグルーを建設した。

▲八甲田ロープウエイ株式会社の柳谷会長、蝦名社長と

⑮「バックカントリー入門講座」：（環境省事業）

実施日：2021 年 1 月 30 日（土）・31 日（日）

会場：青森大学ヒュッテ（モヤヒルズ）

講師：其田知志（酸ヶ湯温泉ツアーガイド）

喜來大智（AOMORI BACE/青森大学４年）

参加者：一般・学生６名

八甲田の冬のバックカントリーには、今や八甲田の雪質とフィールドに魅了された世界中のスキーヤーがやってくる。今季はコロナの影響で全くインバウンドは期待できないが、30 万都市青森の市街地から 1 時間圏内に豊富な自然のフィールドが広がるので、バックカントリーの魅力をもっと地元の若者たちに知ってもらうための初心者対象の講座を実施した。

講師には、酸ヶ湯温泉ツアーガイドの其田氏、4 年ゼミ生の喜來くんをアシスタント講師にお願いした。其田氏は、八甲田山域をフィールドにガイドを 20 年やり尽くしているプロのガイドだ。2 日間にわたってバックカントリーツアーのための知識と技術を伝授いただいた。限られた時間で、知識と技術だけではなくの安全への〝意識〟も開かせてくれる貴重な講座になった。

今回の講座では、初日は、バックカントリーは深い自然に分け入るのでリスクが多いこと、特に冬の八甲田は、過去に悲惨な遭難事件も起きて、イメージが悪かったが、八甲田の「魔の山」を「美しい樹氷原が広がる神秘

の世界」にイメージを変えた三浦敬三氏（プロスキーヤーで冒険家の三浦雄一郎氏の実父）の功績は大きい、と八甲田のバックカントリーの歴史も伝えられた。

そして、自分を守り、仲間を守るためのリスク回避の意識を再認識した。バックカントリーの基本的な知識である服装、携行品について、そして遭難対策装備、雪崩対策７つのステップ、スキー場を越えて入り込むフィールドの知識まで座学に集中した。

２日目の午前中は、雪崩に巻き込まれた仲間を救出するための演習を行った。冬山のツアーに出るときは、ビーコンと呼ばれる発信機を全員が装着することを条件にガイドを行なっている。万が一メンバーが雪崩に遭遇した場合のビーコンの使い方と救出の仕方を学んだ。ビーコンが発する電波の性質、性能を理解して操作した。

その後、スキー、ボードの滑走技術の練習。モヤヒルズのゲレンデであったが、連日の降雪で膝までの深雪がありバックカントリーを味わうことができた。

この講座は、今後大学の授業としても開講する意義があると強く感じた。

最後に、今年度の最後の事業は、2021 年 2/6(土)- 7 (日)にモヤヒルズで「世界イグルー選手権」を予定している。イグルーをより身近な存在に。市民誰もが参加できる、イグルーづくりコンテストを実施する。

コロナで昨年はねぶたが中止となり、オンラインねぶたを実施したネットワークが、2 月 6 日に「オンライン青森冬景色」を予定している。このオンラインとコラボしリンクしてイグルー選手権を伝える企画を用意している。今後、雪国あおもりの冬の新たな風物詩になる方法を模索する。

イグルー選手権の報告は次回の総研だよりで報告をする。

▲ビーコンを操作し雪崩に巻き込まれた仲間を救出するための演習

▲バックカントリーツアーを想定して移動＆スキー、ボードの滑走技術の練習

3. SDGs 研究センター活動報告

SDGs 研究センター所長　藤　公晴

1.SDGs 研究センター勉強会

第 6 回勉強会は 2021 年 1 月 22 日、SDGs 研究センター客員研究員の竹内健悟氏を迎えて「弘前藩庁日記に記録された鳥の話：津軽地方の人と野生生物の関係」を実施した。このテーマは、同氏が昨年 9 月に出版した「弘前藩いきものがたり―弘前藩庁日記に記録された鳥獣の話」（北方新社）をもとにした。参加者はオンラインと会場分をあわせて 37 名で、秋田県と宮城県からの参加者 3 名も含まれる。

竹内氏の講演の骨子のスライドを添付したが（巻末・資料１）、鳥の種類と種類ごとの関わり（調理、幕府への献上、駆除など）、数の推移など、鳥を中心にした当時の多様な文化について詳細かつ興味深く理解できるものだった。また、藩政記録の解読から垣間見える 18 世紀の津軽地方の自然ならびに人の関わりと、今日の状況との対比は、岩木川や津軽平野で鳥類の生態調査、自然環境管理に精力的に取り組む竹内氏ならではの切り口と功績で、今後の人文系環境学という学術分野と、津軽地方の自然環境の再評価にも資するものと推察される。

2.青森山田高等学校特進コース SDGs 共同教育プログラム

本学 4 学部 6 チームが特進コース 2 年生 28 名を対象に行なってきた SDGs 共同教育プログラム。12 月 25 日（金）に中間報告会を青森山田高等学校で

実施し、本学からは社会学部の秋田敏博先生、薬学部の佐藤昌泰先生、小職の 3 名が出席した。限られた時間で各チームの生徒たちは、各テーマにかかる様々な下調べを行っており、発表の構成や声のレベルも良く刺激を受けた。また同日、中間アンケートを実施し、このプログラムにかかる学習の方法や効果、満足度、今後の期待等について当該生徒にたずねた。詳細は下記 QR コードを読み取り当該サイトにアクセスしていただきたいが、本プログラムの効果として、社会的課題への関心や情報収集力の向上をはじめ、様々な分野で本プログラムの効果が垣間見えてきた。3 月 11 日の最終報告会まで約 1 ヶ月、予定を上手く調整して次年度につなげたい。

3.教育の質向上に向けて

前回の総研だより（第 4 号）で触れた通り、昨年度からの SDGs 研究センターの取り組みを踏まえて、「青森大学の教育の質向上にかかる提案書」をセンターで作成し、金井学長宛に 12 月 3 日に提出した。

このような提案書の背景には、本学の退学者数問題の解消策を含めた教育の質の向上と、金井学長が就

任後唱え続けてきた「尖った大学」の具現化に向けた布石という、2つの側面がある。また、本提案は 2021 年度早々の着手を想定しており、実現可能性を勘案し、①初年度教育の充実化と②正課外教育の機会拡充、③内なる国際化の 3 分野に絞ってまとめた。学内稟議を経たものの、予算や組織体制の整備も必要なものであることから、今後関係部署、関係教職員の皆さんとより綿密な意思疎通と調整を図っていきたい。

4.卒業論文 SDGs 研究センター賞 （応募締切：2 月 12 日）

今年度、より質の高い卒業論文の制作に向けた学生と教職員の意識の喚起と、SDGs のさらなる普及啓発を目的に、全学部の卒業論文を対象とする SDGs 研究センター賞の応募作品を募集している。募集対象については、SDGs の紹介と関連づけを明示的に行っているものだけでなく、暗示的な関連づけの作品も含まれる。最優秀賞は、陸奥湾イルカウォッチングツアー 2 人分無料券ないしは QUO カード 10,000 円分で、優秀賞と佳作もあります。自薦他薦問いませんので、詳しくは巻末の応募申請書を参照（資料２）。学生教職員の皆さまの積極的な応募を期待している。

5.第 8 回高校生科学研究コンテスト 2020 SDGs 研究センター賞

今年度で 8 回目を迎えた高校生科学研究コンテスト。SDGs への社会的関心の高まりと人材育成の重要性を踏まえて、SDGs 研究センターで独自の賞を設けました。各エントリー作品が、SDGs との関係を明示しているかという観点より、それぞれの研究が地域社会ならびに地球規模の諸課題の解決・改善とどのように関連づけているかを注視し、それぞれの社会貢献の可能性を評価しました。その結果、五所川原高等学校の天然藍染めと化学藍染めに関する研究（班員:田中智也さん、新岡嵐瑛さん、秋田谷怜実さん、亀海彩さん、安田光来さん、担当教員・佐々木成俊先生）に SDGs 研究センター賞を贈ることに決定した。

6.陸奥湾の漂着ゴミに関する交流会（2/14）

来る 2 月 14 日にミハイ・アポスト氏（本学英語科目非常勤講師）が代表を務める海洋漂着ゴミの収集と普及啓発に取り組む Blue Peace 主催のオンラインカンファレンス「大島から始めよう」 (2/14 10:00~12:00) の共催を行う。陸奥湾の海洋漂着ゴミについては、青森県による「あおもりプラごみゼロ宣言」(2020 年 5 月)など、社会的関心が高まっており、これまでも多くの市民団体や教育機関、個人らが取り組んできた。しかし、分類や計量、処分、PR 活動などについては、十分情報共有されてこなかった為、今回の企画に至った。本センターとしても、初年度教育への導入など、地域の高等教育機関として積極的に取り組む所存です。

7.その他

・黒石商業高等学校 2 年生 80 名対象 SDGs 紹介 (1/29、2/12)
・はちろうプロジェクト勉強会視察（秋田県八郎潟 2/13）
・磐梯朝日国立公園ビジターセンター交流・研修会 ファシリテーター（2/15）
・SDGS 研究センター第 7 回勉強会（2/20）

4.「問屋町型」の SDGs を追求－協同組合青森総合卸センター

SDGs研究センター員　櫛引　素夫

青森市問屋町の協同組合青森総合卸センター（西秀記理事長）は 2020 年度、SDGs 推進委員会を設置し、組合員の企業・団体への普及策を検討してきた。全国の同種組織では、前例のない取り組みという。推進委員長として、この活動に参画する機会を得たことから、概要について報告する。

同組合には県内外の企業や出先など133 社・団体が加盟する。株式会社リビエラ（青森市）、リコージャパン株式会社青森支社、生活協同組合コープあおもりなど、積極的に SDGs 活動を展開する組合員があったことから、組織的な取り組みの機運が高まり、実現に至った。

推進委員会は 2020 年 8 月に初会合を開き、2021 年 1 月まで 3 回の会合を重ねて、先進事例の報告、組合として展開している事業と SDGs の関わりの整理、組合員に普及を図る上での課題を検討した。これらと並行して、組合員アンケートを実施し、現状の把握と効果的な啓発活動の追究を図った。

近日中に、アンケート結果の分析を含めた報告書が作成される見通しのため、本稿では筆者の見聞に基づく感想のみを記すが、以下のようなポイントがあると感じられた。

・SDGs という言葉の認知度は上がってきている

・しかし、間口や奥行きがあまり知られておらず、さまざまな、かつ身近な活動の多くが SDGs に含まれている事実が浸透していない

・このため、多くの企業・団体が、既に SDGs 実現に向けてさまざまな実践を実施しているにもかかわらず、そのことが意識されていないケースが多い

・それだけに、多くの伸びしろがあり、青森の自然環境や地域・社会環境に根ざした、「青森型・問屋町型」SDGs の実現を目指せば、人口減少下でも持続可能な経済活動や地域づくり、人材の確保・育成など、多面的な成果や効果が期待できる

同組合は経済的価値創出事業、社会的価値創出事業、文化的価値創出事業の実施を通したビジネスパークづくりを目指し、ビジネススクールや健康づくりなど多彩な活動を繰り広げてきた。加えて、市内でよく見かける緑と青のロゴマークを起点とした景観創出事業によって、県の第 9 回ふるさとあおもり景観賞で屋外広告物部門、地域づくり活動部門の最優秀賞を受賞するなど、経済活動と地域デザイン、社会デザインを組み合わせた実践において成果を挙げている。このような複合的な取り組みは、地域ブランドの向上につながり、組合員の企業・団体の獲得にも有効だという。

8 月の第 1 回会合㊧、1 月の第 3 回会合の様子。青森総合卸センター提供

全国でも例をみない取り組みというだけに、「問屋町型」の実践を目指せば、上記のように、地域の将来を切り開くスタートラインを引けよう。

推進委員会の活動は 3 月でいったん役割を終えるが、同組合の活動自体は、新年度以降、本格化していくことになる。

5. 「東北新幹線 10 周年」オンライン・フォーラム

地域貢献センター　櫛引　素夫

2020 年 12 月 4 日の東北新幹線全線開通・新青森開業 10 周年に合わせ、社会学部・櫛引研究室と、あおもり創生パートナーズ株式会社・青森商工会議所・櫛引研究室でつくる「あおもり新幹線研究連絡会」は同日夕、オンライン・フォーラム「東北新幹線は何を変えたか コロナ時代にどう変わるか」を開催した。青森大学地域貢献センターの後援を受けた。

フォーラムは 2020 年度の青森大学教育研究プロジェクト「『ウィズ・コロナ』時代における新幹線プロジェクトの変容に関する緊急基礎調査」の一環として開いた。新幹線をテーマとするオンライン・フォーラムの開催は 2020 年 7 月に続き 2 回目で、青森県内をはじめ北海道、首都圏、北陸、九州など全国から約 50 名が参加した。櫛引と、あおもり創生パートナーズ株式会社専務取締役・竹内紀人氏による提起に加え、青森大学付属総合研究所客員研究員の永澤大樹氏（函館市）、九州経済調査協会の大谷友男氏（福岡市）によるクロストークを行った。

櫛引からは、東北新幹線の利用者推移などに基づき、「東北新幹線は大きな恩恵をもたらしているが、その影響の全容はまだ確認し切れていない。巨額の建設費の返済が今後も続く中、より適切な調査法と活用法を追求していく必要がある」と総括した。

竹内氏は「青森県は人口減少に見舞われているにもかかわらず、生産性は向上しており、新幹線の効果は大きい。リモートの普及や往来と対面の新たな価値、交流人口や関係人口など、コロナ時代の向き合い方を考えていく必要がある」と分析した。

永澤氏は、企業が納めた法人税から、新幹線がもたらした経済的効果を検討する手法を紹介しながら「2031 年春には北海道新幹線の札幌延伸が控える。最高速度の向上は、青森県や北東北にも多大な恩恵をもたらす」と強調した。

大谷氏は九州新幹線は東京につながっていないこと、JR 九州の本社が地元にあることなど、東北新幹線との相違点を挙げた上で、「開業 1 年目は新幹線効果がわかりやすく現れたが、時間が経過すればするほど影響する変数が増え、どこまで新幹線の影響か判別が難しく

なる。動向を継続的にフォローする主体も少ない」と課題を分析した。

参加者からは「全国各地の新幹線事情を相対的に見ることができました。新たな視点を得られました。大変有意義な時間となりました」などのコメントが寄せられた。

6.「一人の人間にとっては小さな一歩だが、道民にとっては偉大な一歩」 ―北海道新幹線・210km 高速運行体験

青森大学付属総合研究所・客員研究員　永澤　大樹

2020 年 12 月 31 日から 2021 年 1 月 4 日までの間、北海道新幹線開業から 4 年半を経て初めて、時速 210km での青函トンネル内高速運行が実施された。私が勤務する函館商議所も新幹線開業前からこの問題解決のための活動に取り組んでいて、国土交通省の青函高速化検討ＷＧにも副会頭が委員として参加し意見要望を行ってきたので、高速化を長年待ち望んできた者として 210km/h を経験しておかねばと考え、自費で乗車した。

国交省ＷＧの委員は東京の学識経験者の方々を中心に、青森側は県庁、県商議所連合会、観光連盟。北海道側もそれに準じる団体だが、函館商議所以外はすべて札幌所在のため、ＷＧ委員の方々の北海道新幹線利用頻度は相当少ないはずで（今回の高速運行も殆どの方は乗車されてないと考えられる）、高速化のニーズを国に理解頂き推進してもらうには、利用機会が最も多い函館地域の人間が頑張らなくてはならない。地味な活動ではあるが、開業時に時速 140km だった同区間は 2019 年 3 月に 160km そして今回臨時で 210km 化、新函館・新青森間の最速所要時間は 1 時間 1 分⇒57 分⇒54 分となった。

乗車した 1 月 3 日の行程は、往路はやぶさ 22 号（新函館・新青森間無停車）、復路はやぶさ 19 号（各駅停車）で、青森滞在時間は 2 時間 9 分（この時間内にカーシェアを借り、ラーメン店・ひらこ屋の濃いくち煮干しラーメンを堪能した）。木古内を経て湯の里知内信号場までは通常ダイヤの速度、そこから青函トンネル（第一湯の里トンネル）に入ると車内電光掲示に 210km 運行の情報が流れ、ぐぐっと加速していく加重を体感して、これが本来の新幹線の速度かと感慨深くなり目が潤んできた。トンネル通過時間はストップウォッチ計測で 19 分 5 秒（復路 18 分 57 秒）。総延長が 55,017m（青函トンネル＋第一湯の里トンネル）なので、実際の平均時速は 173km、という計算になる。

最高速度 210km 運行を謳いつつ実際は 173km、ということは、余裕時分が多く取られているということで、これが平均時速 195km なら更に 2 分短縮可能である。新函館北斗・新青森間はJR 北海道の函館・札幌間特急に生じる遅延を吸収するため、平常ダイヤでも最高速度を抑制し 6 分程度の余裕を取っている。札幌延伸時には運行の定時性が高まるため、このぶんの時間短縮も併せて要請していく必要がある。

更にいうと今回の高速化は、貨物列車との共用走行区間 82km のうち青函トンネル区間 55km のみの措置で、前後の 27km は時速 140km のままである。新函館・新青森間の全線が時速 260km で運行できれば所要時間 40 分以内が実現し、将来的には東京・新函館北斗間 3 時間半切りの実現も視野に入ってくる。

高速運行をしている乗車便の乗客の殆どは、わずか

3 分の短縮を気に留めていないと思われるが、道民にとっては（もちろん青森県その他、北海道と往来機会がある全ての人にとって）間違いなく偉大な一歩である。国には今後も速度向上対策のスケジュールを具体的に示して頂きながら、札幌延伸に備えて欲しいと思っている。

7.青森市職員提案選考会に参加して―「青森市ストックフォトプロジェクト」実現に向けて

青森大学付属総合研究所・客員研究員　村上　亜弥

筆者が勤務する青森市役所には職員提案制度があり、毎年選考会が実施されている。令和 2 年度は 2020 年 7 月 1 日から 8 月 7 日まで提案を募集し、企画調整課・財政課・人事課による一次選考（書類選考）を経て、10 月 19 日に二次選考会が行われた。

今年度の応募件数は 19 件で、うち 3 件が二次選考の対象となった。二次選考会では提案者によるプレゼンテーション及び質疑応答を行い、市長・副市長・浪岡区長が提案実施の方向性や順位について協議した。

この職員提案選考会において、筆者の提案した「青森市ストックフォトプロジェクト」が市長賞（第 1 位）に選出された。本提案は市の業務のなかで撮影・作成される画像データを庁内全体で共有し、自由に使用できる仕組みを作るというものである。

提案の背景には、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴うテレワークの導入によってデジタルデータのやりとりが増加し、著作権に関するトラブルが発生しやすくなっていることへの危機感があった。画像を庁内で調達することにより、著作権に関するトラブルに巻き込まれるリスクを低減できるものと考えている。

また、本提案では庁内におけるデータ共有だけでなく、さらに事業を発展させ、青森市オープンデータポータルサイトにおいて画像データを公開することについても述べた。市の業務のなかで撮影・作成される画像データの中には、アプリ開発やパッケージデザイン、オンライン授業などで活用できるものもあると考えられる。すでに画像オープンデータの公開を行っている自治体もあることから、青森市においても庁外へのデータ公開を検討すべきであろう。

なお、本提案については担当課を決定し、実施に向けた準備を進めているとのことである。ぜひ、職員にとって使いやすいストックフォトを構築していただきたい。

◇**総研日誌**（2020 年 12 月 1 日～2021 年 1 月 31 日）

▽12 月 4 日(金)
・東北新幹線全線開通・新青森開業 10 周年記念オンライン・フォーラム
▽12 月 13 日（日）
・第 8 回高校生科学研究コンテスト（成果発表動画の審査に切り替え）
▽12 月 18 日（金）
・青森大学 2020 年度教育研究プロジェクト中間報告会
▽12 月 19 日（土）～20 日（日）
・観光産業中核人材養成講座⑫「雪板づくり＆雪板体験講座」
▽12 月 21 日（月）
・定例運営会議
▽12 月 25 日（金）
・青森山田高校 SDGs 共同教育プログラム・中間報告会
▽12 月 25 日（金）～27 日（日）
・観光産業中核人材養成講座⑬「イグルーマイスター養成講座」
▽12 月 28 日（月）～29 日（火）
・観光産業中核人材養成講座⑭「八甲田トープウエイ山頂駅にイグルー建設」
▽1 月 21 日（木）
・定例運営会議
▽1 月 22 日（金）
・SDGs 研究センター第 6 回勉強会
▽1 月 30 日（土）～31 日（日）
・観光産業中核人材養成講座⑮「バックカントリー入門講座」

◇**編集後記**

「総研だより」第 2 巻第 5 号をお届けします。

波乱に満ちた 2020 年度でしたが、本号の記事を見る限り、例年に劣らない活動が展開されてきたことが確認できます。また、教職員や客員研究員の皆さまからの投稿によって、奥行きや広がりが増してきたと実感します。

新型コロナウイルス感染症の行方はまだ不透明ですが、各国でワクチン接種が始まりましたが、世界が新たなステージに入りつつあることは間違いありません。そして、間もなく 2021 年度がスタートします。

紀要への投稿、そして次号の「たより」へのご寄稿をお待ち申し上げます。（素）

弘前藩庁日記に記録された鳥の話

竹内健悟（青森大学 SDGs研究センター・客員研究員）

今日の内容とポイント

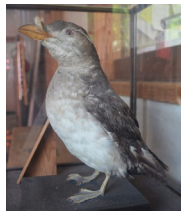
1　鷹待と鷹狩（タカ・ハヤブサ類）
　～お城ではジビエ料理を食べていた？

2　津軽平野に鶴がいた（ツル類）
　～料理用にツルを飼育していた？

3　追鳥狩と雉子献上（キジ・ヤマドリ）
　～乱獲でキジが減った？

4　鳥打ちと鳥移し（カラス類・トビ）
　～カラス担当の役人がいた？

5　幻の善知鳥をさがせ（ウトウ）
　～ウトウの絵はなぜこんな姿に？



ウトウの標本

善知鳥図

1　鷹待と鷹狩

・津軽地方は鷹の名産地で、幕府に毎年鷹を献上していた。

・弘前藩領には鷹待場や鳥屋が数多くあり、鷹の捕獲や鷹狩が行われていた。

・捕獲していた鷹は、オオタカ、ハイタカ、ハヤブサなどで、献上の対象になっていたオオタカの幼鳥（黄鷹）が圧倒的に多く捕獲されていた。

・鷹狩には、藩主が行うもののほかに、鷹匠が行うものがあった。

・鷹匠による鷹狩では、獲物をお城の台所に届けている例が多かった。

・捕獲された鳥類は40種類ほどで、種名がはっきりわかったのは28種であった。

・夏はヒバリやウズラを大量に捕獲し、秋から春にかけては渡ってくるガンやカモ類を多く捕獲していた。鳥類からみて当時は草原が相当広がっていたと推定される。

・江戸から招聘した鷹匠北原伝六が活躍した貞享2年以降捕獲する種類が増え、鷹狩りの技術や知識が向上したと思われる。

・鷹狩や鷹献上は「生類憐れみの令」の期間中止・縮小化された。

2　津軽平野に鶴がいた

・百姓がツル類を上納する仕組みがあり、タンチョウ、マナヅル、ナベヅルが城に届けられていた。ツル類の上納は「生類憐れみの令」の期間も続けられていた。

・タンチョウは春から秋まで通して捕獲されており、繁殖していたと考えられた。

・マナヅルとナベヅルは春と秋の渡りの時期に捕獲されていた。

・当時はツル類が東日本を縦断して渡るルートがあったことが推定された。

・ツル類は津軽平野全体で捕獲されていることから、当時は新田を含めて良好な湿地環境が広がっていたと考えられた。

・ツルの用途は103例中、食料が52例、飼育が12例、献上が2例、不明が37例であった。

・おめでたい席での鶴庖丁・鶴料理のほか、「黒焼き」として薬用にも利用されていた。

・城内では西ノ郭でツル・ガン類等を飼育していた。

・ツル類の飛来、繁殖には当時気候が寒冷化していたことが関係しているかもしれない。

3　追鳥狩と雉子献上

・毎年陰暦11月中下旬頃、雪降りのあとに領内で一斉に追鳥狩（雉子狩）を行い、獲物の一部は幕府に献上された。

・30年間の記録を見ると、75の村々で実施され、元禄3年の281羽が最も多かった。地域としては、和徳組、大鰐組、駒越組の村での捕獲数が多かった。

・追鳥狩は生類憐れみの令、元禄の大飢饉の影響を受け、「寒雉子の上納」や「村狩」の形に変わっていったと推定された。

・年末に江戸幕府等に100羽近いキジを献上していた　**→キジも弘前藩を支えていた！**

・献上先は、将軍、次期将軍、近衛家等。キジは傷の有無等によって上中下にランク付けされていた。

・享保年間以降、「雉子払底」の記録が続出するようになり、津軽地方でキジが減少していることが伺えた。

・キジの減少によって享和3（1803）年に献上中止、文化元（1804）年に鰤献上に代わった。

【資料1】

4　烏打ちと烏移し

・弘前藩では、カラスを鉄砲で駆除していたが、「生類憐れみの令」によって「烏移し」の形になり、「生類憐れみの令」廃止後、再び駆除へと戻った。

・当初、弘前城内に集まるカラス（秋・冬の塒）を駆除していた。
なかには「寒烏」と呼んで薬用（黒焼き）に利用される例もあった。

・「生類憐れみの令」によって、トビとカラスの巣を取り払ったり、卵・雛を移したり、成鳥を生け捕りにする「鳶烏移し」が実施され、元鷹役人達が担当した。
・「鳶烏移し」は、害を受ける他の鳥類を保護するための措置であり、トビとカラスを保護・大事にしようとする意図ではない。

・一年に200羽弱のカラスを「移し」ていた。
ただし、殞烏（おちがらす）が多いことから駆除作業であったとも想像できる。

・巣払いは西北地方まで浸透していた。また、集団営巣するウやサギも駆除の対象だった。

・「生類憐れみの令」廃止後、再び「烏打ち」（駆除）に戻り、年に200羽以上が駆除された。

5　幻の善知鳥を探せ

・江戸幕府からの要望で冬の海にウトウを捕りに行き、幕府に献上することがあった。
寛文年間と享保年間に記録があり、生息状況や飼育について質疑がなされている。

・当時、ウトウは松前大島・小島に生息していて、ウトウの捕獲では上磯のアイヌが活躍した。

・藩で調べた結果では、ウトウはこの時代すでに幻の鳥になっていたと思われた。
　・藩庁内に姿形・生息地等を知っている人がいない。
　・青森周辺で調べたが、知っている人がいない。
　　→ウトウは大島・小島で繁殖し、海上生活をする。
　　→漁師や船乗りでないとみることはできない。一般人の目には触れない。

・外ヶ浜ではウトウよりハナドリ（花鳥）という呼び名が一般的だったと思われる。
　　→嘴の上の突起を鼻に見立てたのが由来で本来は「鼻鳥」。

・津軽図譜の「善知鳥図」がウトウの姿とかけ離れている原因として、実物を見ずに享保4年の「古くから伝わる善知鳥の姿」の記述＝「惣体薄黒鶴程に御座候由。頭の上に長き毛これあり候由」を参考に描いた可能性が考えられた。

各できごとを並べてみると、狩に鳥獣害対策に大忙し！

年		藩主	鷹	雉子	烏	狼
延宝4年	1676	信政			烏打ち（駆除）	
元禄2年	1692		津軽兵庫越境事件			
元禄3年	1693			大規模追鳥狩		狼害
元禄4年	1693			大規模追鳥狩		狼害・狼狩
元禄5年	1693			大規模追鳥狩		狼狩
元禄6年	1693		生類憐れみの令			
			鷹・雉子の狩と献上中止			狼狩
元禄8年	1695		大飢饉			
			鷹を放す		烏移し通達	
元禄9年	1696			寒雉子		
元禄11年	1698		鷹役人転職	寒雉子献上	烏移し役人任命	
元禄12年	1699				烏移し	
元禄13年	1700				烏移し	
宝永6年	1709		生類憐れみの令廃止			
				追鳥狩復活		
正徳1年	1711	信寿	鷹待復活		鷹役人へ復帰	
正徳2年	1712		鷹狩復活			
正徳3年	1713		鷹献上復活		烏打ち（駆除）	
正徳4年	1714			村狩も始まる		

結末は・・・　雉子献上・・享和3年（1803）終了。
鷹献上・・・慶応3年（1867）2月で終了。
鷹狩・・・・慶応3年（1867）9月で終了。
狼荒・・・・明治23年（1890）狼の県内絶滅で終了。
烏の駆除・・現在も継続中。

【資料2】

提出期限:2021 年 2 月 12 日(金)12:00 必着

2020 年度 卒業論文・研究 SDGs 研究センター賞
応募申請書

SDGs該当カテゴリ-マーク(5個まで) など。	
論文・プロジェクトのタイトル	
執筆者(氏名とフリガナ、学籍番号)	指導教官 氏名
論文・プロジェクトの骨子、要旨、Abstracts キーワード(5個まで):	
SDGs 達成に向けた論文・プロジェクトのアピールポイント 	
賞品の受け取り 要 イルカ 不要 Quo カード	
応募申請者(本人でも、教職員でも応募可)	申請者が執筆者と異なる場合は、執筆者の署名

提出期限:2021 年 2 月 12 日(金)12:00 必着

<table>
<tr><td colspan="2">論文データの公表にかかる執筆者本人の同意（同意の可否が審査に影響することはありません）
同意します　　同意しません
（ウェブサイト内で公表しない。）</td></tr>
<tr><td>受 付 担 当 者 記 入 欄
申請書提出日時

総合研究所 担当受付印</td><td>本件の連絡先（氏名と住所、電話番号）</td></tr>
</table>